

教育システム研究開発センターの研究指針と構成

本センターは2年目を迎え、中期的長期的な研究戦略や活動方針を、下図のようにとりまとめました。

1. 研究の全体課題

自由遊び、自学自習、自主、自立など、本学附属3校園の教育において、子どもも教師も「自ずから」課題を見つけ取り組むことを促す「自由教育」の伝統と資産はかけがえのないものです。大正期に興隆をみせた自由教育も、現代という時代や社会なりの価値や意義を見いだされることで再生され、次代へ受け継がれることが可能です。また、幼稚園から中等教育段階まで全校種揃っていることで、本学ならでは可能となる課題に果敢に挑んでいく必要があります。そこで、今、取り組むべき大きな課題として「3歳から18歳までの人間発達をみすえた現代的自由教育のシステム開発」を設定しました。

2. 個別課題

この大課題のもと、三つの中課題を設定しました。それぞれの中課題には図中①～④の下位課題が含まれます。中課題は相互に連携し、全体として大課題の解決に向かっています。

A. 教育システムの分節化

幼稚園の3年の上に6・3・3年に分割されたこれまでの学校教育の分節化を見直し、子どもの発達にとって適切な学校段階の可能性を探究します(発達的分節化の研究)。また、既存の教科内容や教育課程を見直し、子どもの発達や学びに即した教育課程の編成を探究します(領域的分節化の研究)。

B. 学びの自己組織化

学校教育における子どもなりの学びや経験についての研究を進めます。学校や園で可能な学びや経験とは何か、それは子どもの中にどのように起こり、自己形成に資するのか、を追究します。

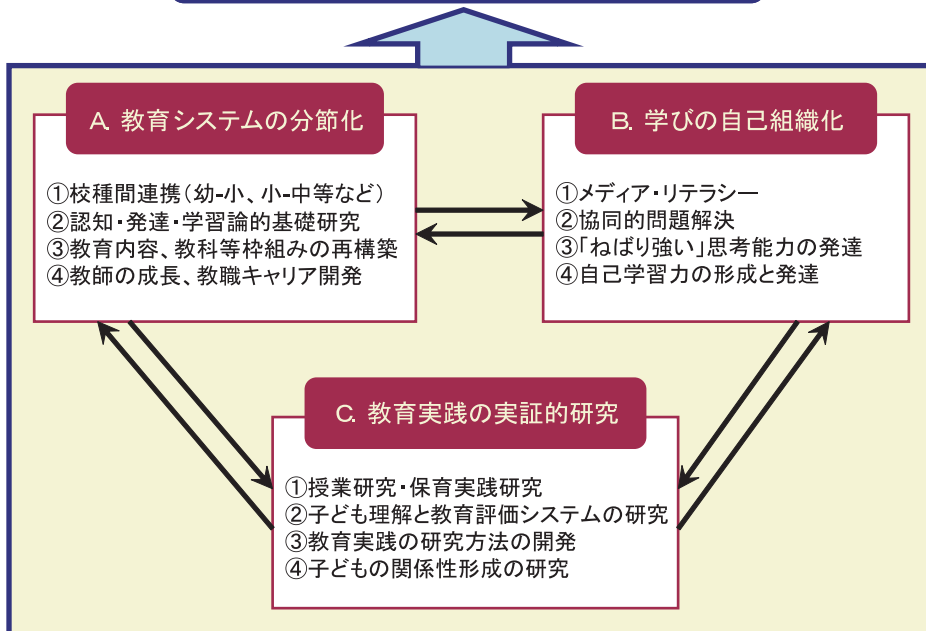
C. 教育実践の実証的研究

Aの制度的研究と、Bの学びの経験の研究は、教育システム開発の両輪です。両者の研究の実効性を高めるために、教育現場で何が起きているのか、実践そのものに焦点を当てた実証的研究を進めていきます。

3. 本年度の研究活動

本年度は表1に示した7つの研究を行っています。研究活動は、内田聖二センター長以下9名のセンター員と2名の研究協力員が中心を担います。センターの運営には、各部署から4名の運営委員会委員とセンター員があたっています(表2)。

3歳から18歳までの人間発達をみすえた
現代的自由教育のシステム開発



平成17年度の研究課題	責任者
①学校における言説空間の輻輳性に着目した授業研究	本山
②理数科系教育改革に向けた科学への興味・意欲・信頼の研究	天ヶ瀬
③教育場面における物語知の臨床実践の基礎研究	本山
④就学移行期5歳児と小学1年生における協同的問題解決の発達	飯島・金津 岩井
⑤中等教育における市民的資質向上に向けたメディア・リテラシーの教育研究	鮫島・吉田
⑥幼小及び小中移行期における学びの自己組織化に関する研究	金津・岩井
⑦幼稚園5歳児の育ちとその評価をめぐる研究	飯島・岩井

表1

役割	氏名	所属
センター長	内田 聖二	文学部教授
	八木 秀夫	文学部教授
センター運営委員	鈴木 孝仁	理学部教授
	松生 勝	生活環境学部教授
	小山 俊輔	文学部助教授
センター員 (センター運営委員)	西村 拓生	文学部助教授 (在外研修中)
	天ヶ瀬 正博	文学部助教授
	本山 方子	文学部助教授
	吉田 信也	中等教育学校教諭
	鮫島 京一	中等教育学校教諭
	岩井 邦夫	小学校教諭
研究協力員	金津 琢哉	小学校教諭
	飯島 貴子	幼稚園教諭
	麻生 武	文学部教授
	森岡 正芳	文学部教授

表2

第3回 大学—附属連携フォーラム

2005年6月24日（金）と25日（土）の2日間にわたって、大学—附属連携フォーラムを奈良女子大学教育システム研究開発センター・同 附属学校部とお茶の水女子大学子ども発達教育研究センター・同 附属学校部の共催で開催しました。

■第1日目 授業参観と懇談会

2005年6月24日（金）午前9時から午後5時（附属幼稚園のみ午後3時半）

於・奈良女子大学附属中等教育学校、同小学校、同幼稚園（奈良県奈良市）

■第2日目 フォーラム

「附属の役割の見直しと連携の可能性」

2005年6月25日（土）午前10時から午後1時

於・奈良女子大学（奈良県奈良市）

第3回目となる今回のフォーラムでは弘前や鳥取などの全国各地から70名近い参加者を得ました。各プログラムについて順次報告致します。

■第1日目 授業参観と懇談会

【附属幼稚園】

6月24日（金）には、お茶の水女子大学子ども発達科学センター、弘前大学、宮城教育大学附属幼稚園の先生方の参観がありました。当日は、「なかよしクラブ」という異年齢保育（4・5歳児混合保育 各グループ約20～22名、6グループ）を公開しました（実施期間中は3歳児休園）。七夕を前に笹飾りを作るコーナー、金魚すくいごっこや水の移し替えができる水遊びコーナーなどの環境を全教師で打ち合わせをして準備しました。子ども達が自由に遊びを選択し、それぞれの遊びの場で異年齢の友達と関わって仲良く遊んでいました。午後の懇談会では、宮城教育大学附属幼稚園、当大学教育システム開発研究センターの先生とともに、当日の環境構成や子どもの遊びの様子についてや、大学・各附属学校との研究協力体制のあり方や研究の進め方などについて話し合いました。

また、フォーラムについては、全国の大学や附属学校園の異校種の先生が集まって、互いの研究を発表したり情報交換をしたりすることができるよい機会なので今後も続けてほしい、地域との連携や貢献の重要性を感じたなどの感想が出ていました。

【附属小学校】

附属小学校会場では、以下のような日程で学習を公開し、交流会を持ちました。

(1) 学習参観① 11：50～12：30

2年月組 けいこ（国語）＜2年月組教室＞
指導者（金津琢哉）

5年星組 しごと＜5年星組教室＞
指導者（阪本一英）

(2) 学習参観② 13：40～14：40

低学年 なかよし（低学年集会）＜体育館＞
指導者（低学年担任）

6年星組 けいこ（算数）＜6年星組教室＞
指導者（太田 誠）

5年月組 けいこ（造形）＜造形室＞
指導者（嶋守哲夫）

(3) 学習参観③ 14：40～15：40

高学年 なかよし（高学年集会）＜体育館＞
指導者（高学年・専科担任）

(4) 懇談・意見交換会 16：00～17：00 ＜会議室＞ 進行（杉澤 学）

- ・あいさつ（奈良女子大学附属小学校 校長）
- ・研究の概要説明（研究部長）
- ・質疑応答（学習参観について他）

○交流会で交わされた意見や感想はおよそ次のようなものでした。

- ・とても静かで落ち着いた雰囲気を感じた。
- ・子どもたちに時間を保証している。「待つ」という雰囲気が見られた。
- ・子どもが進行していく司会の様子に育ちが見られた。
- ・対話、交流力をつけたいと願い、実践を積み上げてきている立場からすると、聞く力は育ってきているように見えた。その上で、聞いて応じていく力をつけたいと考えている。
- ・生活の中から発想してきた欲求を、教師が価値ある学びにしていくにはどうしたらよいか考えている。
- ・教科と「しごと」「けいこ」「なかよし」との関連づけをどのように説明していくのか。幼稚園からのボトムアップ思考で、「学習分野」としてとらえ直していくという考え方もある。
- ・教師が質の深まりをねらったとき、子どもとずれが生じたときに、どのようにしたらよいか。

子どもの事実をきっかけにして、それぞれの参加者が抱えている問題意識を、お互いに問い合う真剣な協議となりました。

【附属中等教育学校】

6・7時間目の5年生（高2）「文化と社会」（社会科 公民領域と美術の融合教科）を参観いただきました（15名）。本時は、次時に組まれている小説コンテストの準備であり、各班の作品選考・コンテストにおける発表方法を学習課題としました。参観者にも一連の作業に加わっていただきました。

懇談会では、既存の教科枠組みを再分節化した本教科の構想・カリキュラムについて、とくに学力論・評価論の二つの観点から意見交換を行いました。



「附属の役割の見直しと連携の可能性」

■第2日目 フォーラム

「附属の役割の見直しと連携の可能性」

近年、独自の教育研究を進める公立学校が増え、かつては国立附属ゆえに差異化できた実践は、今やどこでも可能になりつつあります。文部科学省が新たに示す方針への対応は、旧来からのしがらみのない公立学校の方がいまや俊敏でさえあります。

そこで、今回のフォーラムでは、大学附属ゆえに可能になる教育研究のあり方を探るために、「研究政策」の視点から討論を行いました。研究政策とは、経験的に教育研究を進めるのではなく、自らが取り組む教育研究活動全般にわたるマネジメント戦略のことです。例えば、その研究をより精緻にしていくための研究の進め方や戦略、研究環境や研究活動の構成のあり方、研究自体の有効性や限界の評価などが含まれます。

大学附属学校園であることの最大の利点は、研究資源として大学の環境や研究者を活用しやすいことです。例えば、教育をみる別の視点として、また、教材や専門家の宝庫として、学習環境の一部として、反省的な「研究」活動のモデルとしてなど、大学が身近にあることで可能になる研究や展開があるのではないのでしょうか。

附属学校園における研究政策の立案と実現は、大学と

連携することによって何がどのように可能になるのだろうか。また、大学とはどのように研究を共にできるのだろうか。今回のフォーラムでは、実際に進められている研究を事例に、大学との連携によって可能になる研究政策の有効性と問題点について討論することにしました。

フォーラムにあたり、まず、教員養成系大学附属校2校と一般大学附属校2校（お茶の水女子大学と奈良女子大学）から、それぞれの校園での現状と今後の展開の可能性について、下記の通りの問題提起がありました。その後、フロアを交えて討論がなされました。

各校からの問題提起では、大学が教員養成系であるか否かということや、人事交流などを含めて地域との連携のあり方の違いなど、個別的な事情によって検討すべき課題が微妙に異なることが浮き彫りにされました。しかしながら、教育と開発研究を今後いかにして大学附属として特質あるものとしていくかという共通の課題が確認されました。フロアからも活発な発言があり、問題提起をした校園以外からもさまざまな情報や検討課題が寄せられました。今後、全国規模でさまざまな機会をもち、それぞれの課題の違いを超えて、情報を交換し協同することの必要性を実感させるフォーラムとなりました。



◆問題提起1

宗我部義則（お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター）

「幼小中12年間の連携型一貫カリキュラムの開発と大学附属連携」

大学のセンター（子ども発達教育研究センター）との連携体制とそれに基づくカリキュラム研究開発（文部科学省研究開発学校）の現在の取り組みそして今後の可能性について



◆問題提起2

橋本雅子（京都教育大学附属京都中学校副校長）

「大学教員と連携をはかる附属京都中学校の研究」

「9年制義務教育学校」の設立に向けた小中学校9年一貫教育システムに関する研究開発（文部科学省研究開発学校）における現在の取り組みから見た、大学一附属連携と開発学校の今後の可能性について



◆問題提起3

安藤和也（鳥取大学附属中学校研究主任）

「地域への貢献と大学との連携について」

附属と地域との連携における大学一附属連携の新たな可能性について



◆問題提起4

鮫島京一（奈良女子大学附属中等教育学校・教育システム研究開発センター）

「自立をめざす試みとしての研究政策」

附属として蓄積してきた知的・実践的遺産や課題を、大学との連携によって、大学附属ゆえになしうる「研究政策」として差異化することの可能性について



◆コメント

酒井 朗（お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター長）

本山方子（奈良女子大学文学部・教育システム研究開発センター）



◆司会

天ヶ瀬正博（奈良女子大学文学部・教育システム研究開発センター）

◆全体総括

内田聖二（奈良女子大学文学部・教育システム研究開発センター長）

幼稚園 公開保育研究会・シンポジウム

附属幼稚園では、2005年10月25日（火）公開保育研究会を行いました。午前中の公開保育に続いて、午後からは、センター共催でのシンポジウムを開催し、143名の参加者がありました。

〈テーマ〉

「子どもの看とりから記述へ、記述から評価へ
—保育現場における子ども理解のサイクル—」

〈提案者〉 附属幼稚園 柿元みはる・松田登紀

〈話題提供者〉 附属小学校 岩井邦夫(センター員)

〈指導助言及び講話〉

鳴門教育大学教授 佐々木宏子先生

〈司会〉 本学文学部 本山方子(センター員)

● 提案内容

附属幼稚園では、「遊びの中で子どもが学ぶこと、育つこと —一人ひとりの育ちの確かめと小学校に接続する学びを考える—」というテーマについて、研究、実践を重ねている。今年度は、「一人ひとりの育ちの確かめ」のため、一人ひとりの子どもの育ちが、担任は勿論、第三者が見てもわかりやすい個人の記録「個人ファイル」の形式を考えている。さらに、国立教育政策研究所から「全国的かつ総合的な学力調査に関わる研究指定校」の指定を受けて、調査を実施している。

これらの研究、調査をする中で、

- ・子どもの行動や表情、言葉、態度などから、その子どもの内面や思いをどのように捉えるか
- ・子どもの変化や成長の記録、活動の記録などを第三者にわかりやすく伝えるためには、どうすればよいのか
- ・次への実践に生かすための子どもに対する評価や、自分の保育に対する評価は、どう行えばよいのか

ということの大切さと難しさを改めて感じさせられた。これらについて、教師全員で話し合いを重ねる中で「子どもの看とりから記述へ、記述から評価へ —保育現場における子ども理解のサイクル—」というシンポジウムのテーマが生まれてきた。看とり・記述・評価については、次のように考えている。

《看とり》

・行動、言葉、表情、態度から子どもの思いや心の動き、変化などを捉えること。

☆子どもの気持ちに寄り添い、個人や集団の成長を願ったまなざしで見る。

《記述》

・子どもの育ちを確かめ、自分自身の保育を振り返ったり、第三者に伝えるため、看とったことを文字化して残すこと。

☆この記述から、何を求める事ができるのか、何を目的として記述するのかを考えながら、事実の羅列だけでなく、保育者の読み取りを加える。

《評価》

・記述を基に子どもの育ちを捉え、その子への願いを明確にしていくこと。また、より適切な指導や援助を行うため、保育者自身の実践を振り返ること。

☆振り返るだけでなく、今後の保育や指導・援助に生かし次への看とりにつなげる。

☆大切にしたいこと、気をつけていること

毎日の保育では、看とりや評価を瞬時に行っており、全てを記述して残すことはできないが、ある時点で立ち止まって、観点を決めて捉えること、いろいろな期間で捉えること、できるだけ記述として残すことを意識し、常に教師がその子どもへの願いをもちながら、この3つを何度も繰り返していくことがより確かな子ども理解とより良い援助につながっていくのではないだろうか。

以上の提案について一人の年長男児(T男)を取り上げ、

6月の姿(ビデオ)→教師の看とり・記述・評価
→援助の方向→9月の姿(ビデオ)→教師の看とり・記述・評価

という形で具体的事例も発表した。

● 主な質問、感想等

- ・多忙な保育の中での実際の記述の工夫は？
- ・T男のそれまでの成長、変化の様子やねらい、教師の願いは？
- ・T男だけでなくその周りの友達に対する教師の援助はどのように考えているか？
- ・保育中は看とりの連続。看とりの中に保育の面白さを感じる。

● 岩井先生のお話

- ・授業を参観した幼稚園の教師の経験のある保護者から、子どもが、今、何を考え何をしようとしているかを捉えて、適切な言葉をかけていると感想をもらったことがあった。一人ひとりの思いに沿って、よく見ること、指導すること、評価することは、幼稚園でも小学校でも大事である。
- ・小学校へ行っても幼稚園でしたようなことを、繰り返している。けれどもそこには違う学びがあり、繰り返し学ぶことで子どもが成長していくことが多々ある。



● 佐々木先生の指導助言・講話

- ・看とり・記述・評価は、学校にとってますます重要になってくる。担任は、その子どもの家庭背景や成長の過程、人間関係などをふまえて記録をとるので、深い人間解釈と看とりをしている。
- ・資料の内容では、もう少し詳しく書いてあるところがあればもっとよかった。例えば、「Y男にあこがれていた」という記述は、どういう面にあこがれていたのか、先生を遠くまで呼びに言ったT男の思いは何だったのか、T男への支援は具体的にどのような言葉で伝えたのか、などである。これらを加えて、更に深みのある資料として仕上げしてほしい。
- ・幼児期には、人間関係の成熟が一番大事である。子どもたちだけで関係性が取り結べるようになった時、そのクラスの「財」になる。幼小の連携をやっている幼稚園で蓄積された、友達の中で自ら行動し学ぶ力を、小学校のどんな活動で保障していくのか難しいと感じている。

奈良女子大学教育システム研究開発センターNewsletter 03

2005年11月発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

〒630-8506 奈良市北魚屋西町

奈良女子大学 H棟505 TEL. 0742-20-3352

Web <http://www.crades.nara-wu.ac.jp/>

mail crades@cc.nara-wu.ac.jp